



カワゴエ・プレミアム

7

小江戸に
くるひと、
住まうひと。

kawagoe
premium

角布 2
Corner Cloth

3.

靴をみがく
ということ



愛着を持って長く使い続けられるものに出会えることはうれしい。かれこれ15年以上前、散歩をしていた時に目に飛び込んできた1足。ブラウンに近いオリーブ色で、先がほど良くまるっこく、しっかりした作りの紐のついた革の靴。雨に濡れ、しわができ、キズやスレが付いたりしながらも、少しずつ育った靴。今では足に馴染み、履き心地抜群。

この靴と出会ったことで磨く楽しさを覚えた。磨く道具がかっこよかったことも好きになったきっかけかもしれ

ないが、歩くための道具である靴、ために手入れをして長く使いたいと思うようになった。

ピカピカにはしないで、しっとりとした味わいのある艶に仕上げるのが好き。最後に少しお水をつけて磨くといいよと教えてもらい、やってみたら、ホント！ いい感じ。磨き上がった靴に、今日はどんな靴下やタイツを合わせようかと考えることもまた楽しい。

更なる経年変化を愉しみながらこれから先も育ててく。

しらつちまゆみ
雑貨店 Banon の店主。そのシンプルで丁寧なライフスタイルの提案に男女問わず多くのファンがいる。

Banon
川越市元町1-12-7
049-277-4300
12:00-18:00
月 - 水定休

les secrets de la ruelle de Kawagoe

川越の路地裏の秘密



川越の城下町には、江戸時代からの道が多く残っている
喧騒から離れた住宅街の小道にふと、古の空気を感ずることがある

何度も通っているはずの小路なのに初めて気づく
壁の色、古木の木陰、苔むした石
一体いつからあるのだろうか

このまちの景色は
残るべくして残ったのか
残されてしまったのか

多くの来訪者が行き交う日々の中で
ここを故郷にした先人たちを想う

混沌とした時の中で
この地に残されてきたモノたち

その価値を今
もう一度、問う

4 特集 1

小村雪岱 その美しき面影

特別寄稿 山口信博

18 特集 2

陰翳礼讃 ―川越の蔵にみる、日本の暮らしと暗闇―

亀屋 陶舗やまわ 小島家宅(tea salon 1901)

34 インタビュー

ほしおさなえ先生と歩く川越

新連載

36 Explore Saitama ご近所市町村を訪ねる

秩父 [MAPLE BASE]

連載

1 なんでもない日々のこと。

16 いつものください [あぶり珈琲]

17 川越スカラ座の cinema! cinema! cinema!

28 川越 day & night

野々山養蜂園 小川菊

32 僕と散歩と気ままなレシピ

33 こはるびより

38 川越四方山話

40 川越人 天台宗 喜多院 第五九世住職 塩入秀知

※掲載内容は全て 2025 年 3 月までに取材した内容となります。料金は一部をのぞき、税込表記です。情報については各施設・店舗の公式 HP や SNS 等をご確認ください。

株式会社櫻井印刷所 kawagoe premium 編集長 櫻井理恵

数年ぶりに、kawagoe premium の発行に漕ぎつきました。関係者の皆様、読者の皆様には、発行が中断し多大なご迷惑をおかけいたしました。心よりお詫び申し上げます。

さて、世界中が大きな変化を余儀なくされた新型コロナウイルスも落ち着きを見せたように思います。いつもの日常が如何に大切で、尊いものだったか。「いつもどおり」がだんだん無くなっていったあの日々に、私自身の中からも何かが少しずつ無くなっていったように思います。折しも印刷業界の縮小が進み、多くの仲間たちが会社をたたんでいく中、櫻井印刷所も百周年を目前に「これからどうしていったらいいのか」を考えあぐねる毎日に突然起こったコロナ禍。フリーペーパーの kawagoe premium を発行し、まちのことを伝えていく意味はなんなのか。こんなにもありとあらゆる日常がストップし、万が一にも感染すれば明日を生きられるかもわからない状況に、強く持っていたはずの想いが大きく揺らぎました。

そんな時に川越市・川越商工会議所・小江戸川越観光協会が発信した「越えていこう、川越」プロジェクトをみなさんは覚えていらっしゃいますか？。いくつもの困難を越えてきたまち、川越――その言葉に大きな力をもたらしたのは私だけではないでしょう。私たちが進むべき未来を、住む人々が一丸となって作っていく。約七百もの事業者・個人の方が、同じスローガンを掲げ、まちの力を信じた瞬間でした。

そして日常が戻り、二〇二四年創業から百周年を迎えるにあたり、櫻井印刷所は常に川越と共にあった、ということを強く思うと同時に、kawagoe premium の発行をずっと待っていますと言ってくださっているまちの皆さんの言葉にまた触れる機会がありました。もう一度、何か川越のためにできることをひとつずつやっていこう。遅々とした進みではありましたが、この度 kawagoe premium の 7 号を発行いたします。

取材させていただいた方、そしてお手にとってくださいただった方々に心から感謝いたします。

小村雪岱

その美しき面影

大正から昭和にかけて、さまざまな分野で活躍した美術家・小村雪岱^{せつたい}。
今でもその細やかな画風が人気の雪岱、実はここ、川越出身。
今回は、雪岱が手がけた美しく物語る装丁と挿絵の世界を特集します。

文＝櫻井理恵 写真＝熊谷昭典 イラスト＝上坂じゅりこ

小村雪岱の生涯

小村雪岱は明治二十年（一八八七）に、川越町郭町（現川越市郭町）に生まれた。本名は泰助。なお小村家は川越藩士の家柄であった。両親と幼くして離別し、小学校を卒業したのちには神田神保町の叔母のもとに身を寄せた。のちに日本橋に住む書家、安並賢輔の書生をし、のちに養子縁組をして安並性となった。絵を描くことに興味を持ち、明治三十七年（一九〇四）に東京美術学校日本画科選科で下村観山に師事して、古典絵画の模写、写生など、画技の基礎教育を受けた。

美術学校卒業後、雪岱は木版多色摺図版の版下絵の制作をするにあたり、仏画や絵巻、浮世絵を模写して伝統美に接することで、控えめな色彩に対して見るものを楽しませる構図や風俗考証など豊富な知識と技術を得た。また画号「雪岱」を授けたのは、文豪の泉鏡花。鏡花は雪岱の人生に大きな影響を与えた作家でもある。大正三年（一九一四）、泉鏡花の『日本橋』の装丁を手掛け、一躍有名になっていった。以後、雪岱が生涯に手がけた本の装丁は二百冊以上に及ぶ。また大正十一年（一九二二）に手がけた里見弴の『多情佛

心』をはじめとし、新聞や雑誌などに多くの挿絵を描いた。また古典に詳しくかった雪岱には、芝居の舞台装置制作の声もかかり、大正十三年（一九二四）の『忠直卿行状記』から二百作以上の芝居を担当した。

雪岱が手がける装丁や挿絵は線と面で構成された平面的な表現で、木版摺りや機械の印刷方法に馴染みやすく、そういった技をうまく使いこなしながら一目で雪岱が描いたとわかる特徴が創り出されている。こうした雪岱の画

業から育まれたスタイルは「雪岱調」と呼ばれ、日本の伝統的な美意識と表現の型をベースとしながらも繊細かつ大胆な作風が、人々を魅了した。また三十一歳の時には資生堂意匠部（のちの宣伝部）に入社し、資生堂デザインの基礎作りにも携わっていた。

さまざまな分野で評価された雪岱は、多忙な毎日を送っていたが、昭和十五年（一九四〇）、連載中であった「西郷隆盛」の挿絵を仕上げ、打ち合わせから帰宅したのち、脳溢血で倒れ、同年

十月十七日に五十三歳でこの世を去った。

泉鏡花と小村雪岱

雪岱にとって、泉鏡花は運命の人である。「雪岱」の画号を受けたばかりでなく、装幀家、挿絵画家としての雪岱があるのは、鏡花あってこそと言える。雪岱は鏡花より十四歳年下で、美



明治20年	1887	3月24日、川越町郭町に父小村繁門、母もんの長男として生まれる。本名泰助。
明治23年	1890	3歳。父が日本鉄道株式会社勤務のため、下谷区金杉上町へ転居。
明治24年	1891	4歳。父の病氣療養のため川越へ戻るが、父は死去。
明治25年	1892	5歳。父の実弟である小村萬吉に養育される。川越小学校入学。
明治33年	1900	13歳。叔父の奉職により転校した坂戸小学校高等科を卒業。
明治34年	1901	14歳。父の実妹市川美保方に寄宿。神田区神保町に住む。
明治35年	1902	15歳。書家の安並賢輔方の学僕となり、日本橋檜物町に住む。
明治36年	1903	16歳。画家を目指し、荒木寛畝塾に入門。
明治37年	1904	17歳。東京美術学校（現東京藝術大学）日本画科選科に入学。40年から下村観山教室で学ぶ。
明治38年	1905	18歳。安並家と養子縁組する。
明治41年	1908	21歳。東京美術学校卒業。卒業制作《春昼》。
明治42年	1909	22歳。泉鏡花より「雪岱」号を授かる。
明治43年	1910	23歳。美術雑誌の国華社に入社。古画の模写に従事する。
大正3年	1914	27歳。泉鏡花『日本橋』の装幀が好評を博す。
大正7年	1918	31歳。資生堂意匠部に入社。
大正8年	1919	32歳。泉鏡花の世話で田村八重と結婚。泉鏡花を囲む九九九会が十月に発足。
大正11年	1922	35歳。里見弴作「多情佛心」（時事新報）で初めて新聞連載挿絵を手がける。
大正12年	1923	36歳。資生堂意匠部にて、矢部季とともに現行の資生堂書体に近い宋朝風書体を考案。十二月に資生堂を退社。
大正13年	1924	37歳。浅草・公園劇場『忠直卿行状記』で初めて舞台装置を手がける。
大正15年	1926	39歳。新橋演舞場「安土の春」の舞台装置などを担当。
昭和3年	1928	41歳。歌舞伎座「幻梔久」の舞台装置などを担当。
昭和7年	1932	45歳。邦枝完二作「江戸役者」（東京日日新聞、大阪毎日新聞）の挿絵を担当。
昭和8年	1933	46歳。邦枝完二作「おせん」（東京朝日新聞、大阪朝日新聞）の挿絵を担当、人気を不動のものとする。
昭和9年	1934	47歳。邦枝完二作「お傳地獄」（読売新聞）の挿絵を担当。
昭和14年	1939	52歳。小村雪岱・田坂柏雲二人展（伊勢丹）に出品。
昭和15年	1940	53歳。十月一五日夜に脳溢血で倒れ、十七日に麹町平河町の自宅にて死去。世田谷区烏山妙高寺に葬られる。

小村雪岱 略年譜

術学校在学中に、幻想と妖美の文豪である鏡花の作品を知った。また卒業制作でも鏡花の作品を主題にしている。その後、明治四十二年頃に知人宅で偶然鏡花に出会ったことから、二人の交流が始まった。雪岱が初めて手がけた『日本橋』の装幀も泉鏡花の書き下ろしの単行本で、当時無名だった雪岱を鏡花が抜擢した。日本橋川を行き交う船と白壁が並ぶ蔵に蝶、見返しには四季の風情を描いた雪岱は、小説の舞台である日本橋界隈は青春時代に過した地でもあった。この仕事が評判となり、多くの鏡花の著作の装幀を手がけ、その美しい意匠は今でも高く評価されている。鏡花との交流により、雪岱の世界も広がっていった。挿絵の仕事を始めたのも、鏡花を慕う九九九会のメンバーでもあった里見弴からの依頼がきっかけであった。鏡花と雪岱は多くの共作を残し、鏡花亡き後は彼の墓も雪岱が設計したが、その一年後、雪岱もこの世を去った。

雪岱が描いた 女たち

雪岱は昭和八年（一九三三年）九月から十二月まで朝日新聞で連載されていた邦枝完二の「おせん」で挿絵を担当

していた。舞台は江戸時代。谷中にある茶屋の看板娘で江戸一番の美人と言われているおせんと幼馴染で人気役者となった瀬川菊之丞との悲恋を描いた小説である。主人公の笠森おせんは鈴木春信が錦絵を描き評判になった実在の美人。雪岱はこの主人公をほっそりと清潔感がある娘として描き、「昭和の春信」として絶賛された。おせんの姿のデフォルメはもちろん、激しく降

る雨を表した直線、人混みを表現した重なり合う傘の表現、古典絵画に見られる吹抜屋台、俯瞰など、その作風が挿絵画家としての地位を確立させた。また邦枝完二と雪岱が組んだ新聞連載小説の三作目「お傳地獄」は、昭和九年（一九四二）九月から翌年の五月まで読売新聞で連載された。明治期に強盗の罪で斬首された高橋傳の生涯をモチーフにしており、雪岱はおせんとは

違った魔性の女を描いた。和洋が混在する明治の情景が織り交ぜられ、雪岱のすっきりした線画が表現する明快な構成が新時代を余すところなく表現している。また黒で塗りつぶされた表現は、風景だけでなくお傳の心の闇を効果的に表し、強烈な印象を残した。連載が終了すると、雪岱が装幀を手がけた単行本も発売され、邦枝完二との共作が続いた。



雪岱の 肉筆画

東京美術学校で正大な日本が教育を受けた雪岱は、いつの間にか装幀、挿絵、舞台美術が本業となっていた。いずれの分野でも評価され、晩年まで多忙だった雪岱。しかし点数は少ないものの、肉筆画も残しており、ほとんどが依頼されて描いたものだ。「青柳」「落葉」「雪の朝」は、資生堂関係者が所蔵していた。装幀や挿絵に通じる雪岱調は、この肉筆画にも表れている。また美人画でも流れるような筆運び、着物の柄や女性の髪を描き方は、肉筆画だからこそ雪岱の色彩感覚や技術を感じることができる。雪岱は仏像が好きで、晩年は仏画を描いていたと話していたというが、その願いは叶わず、多忙のうちにこの世を去った。

デザイナーとして の小村雪岱

装幀家として活躍した大正から昭和初期は、出版社が競い合い、こだわった美しい装幀の本を世に送り出した時代である。人気だった雪岱の名前を冠

して発売すれば本の価値が上がり、雪岱は晩年まで多忙な日々を送っていた。

雪岱の意匠の特徴は、絵画的なものや図案的なもの二つが挙げられる。物語の舞台を装幀で表し、読者その世界に引き込む。本を立体的に、あるいは平面的に考え工夫を凝らされた意匠は、舞台装置の考案や美術考証を任されるほどの才能を持つ雪岱ならでは。『銀砂子』の著者である鍋木清方は雪岱について、「素材を前にして何を描かうかと考えるより、どんな意匠でこの素材の面白味を表はして見ようかと、その工夫に一ばん頭脳を使つたらうと想像される」（序「小村雪岱」高見澤木版社、昭和十七年）と語っている。現代とは全く違ってすべて人の手によって多くの工程を経て出来上がった本が、この時代においていかに多くの人々を楽しませできたか。雪岱が心を砕き、作

者と共に創り上げていった意匠は、今の私たちにも深く響くものがある。

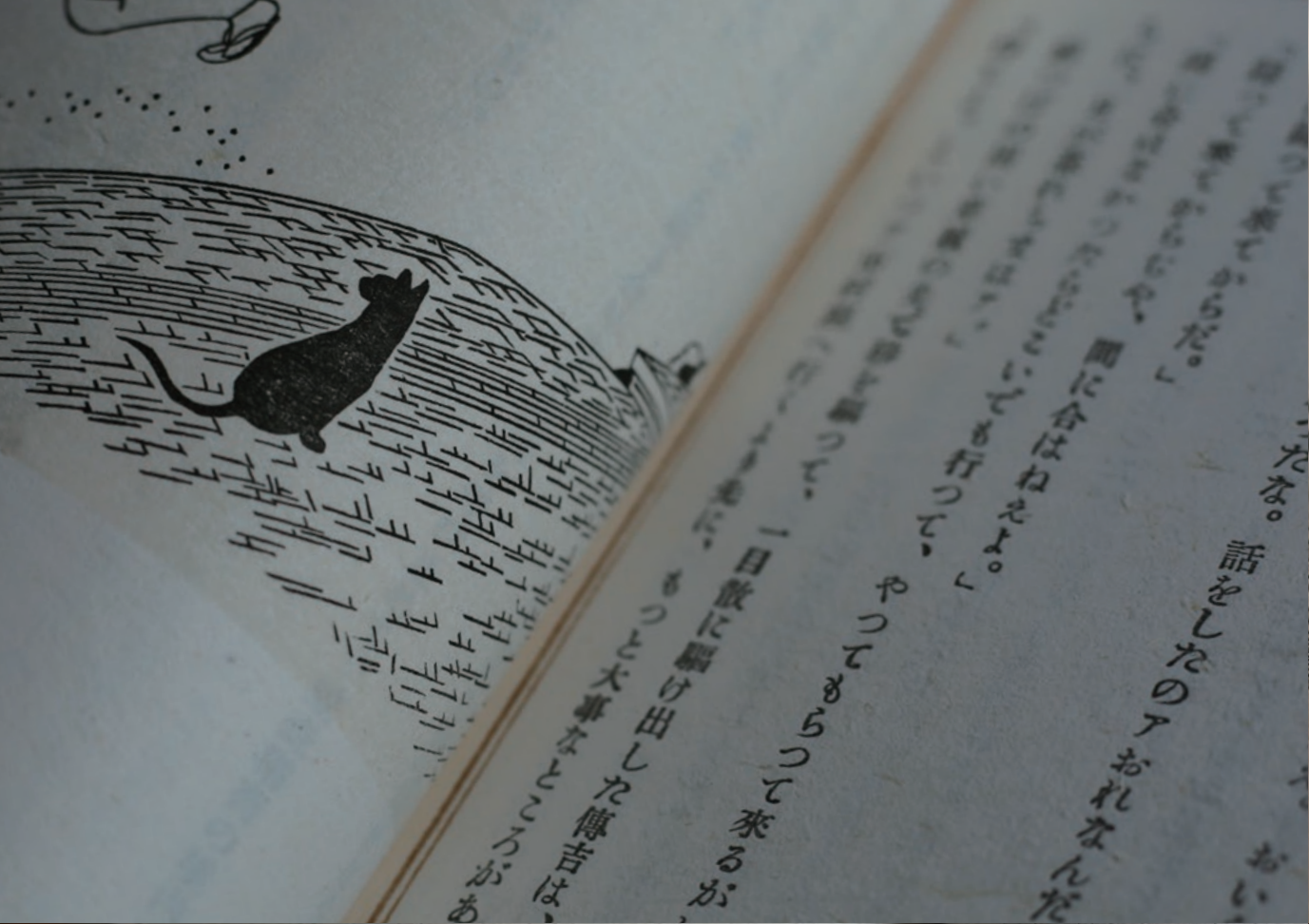
川越の地が 育んだ文化人

川越で幼少期を過ごした雪岱だが、実際の画業は引越した東京での活動が中心であった。「川越は比較的、出身であつたり在住していた画家が多い地域です。江戸から続く商業のまちであることから、そういった芸術に明るい人々が流入してきた背景があると考えられます」と話すのは川越市立美術館の学芸員、折井貴恵氏。裕福な商家や武家では習い事として絵画に嗜むことも多かったことから、文化の土壌が育まれてきた。控えめな中に卓越した技術を駆使し、深い思慮を表現しな

がら美しい芸術を織り上げていった小村雪岱。彼が暮らしたこの川越の地で、私たちが芸術という側面からもう一度故郷を見つめ直し、連綿と続く文化の流れに触れる時、これから作り上げるべき川越の未来に、また新たな展望が生まれてくるのではないだろうか。

参考文献

- 『小村雪岱―物語る意匠』大越久子 埼玉県近代美術館、東京美術発行 二〇一四年
 - 『小村雪岱―「雪岱調」のできるまで』（展覧会図録）川越市立美術館 二〇一八年
 - 『小村雪岱』高見澤木版社、一九四二年
 - 『川越市百周年記念誌』川越市、二〇二二年
- 協力
上野英二
川越市立美術館



グラフィックデザイナー

山口信博

朝、目を覚ますと家の外の音が普段とちがっていることに気がついた。今から七十余年前の昭和二十九年の冬のことである。その日は、前日の夜半から雪が降り始め、関東地方にはめずらしい大雪となった。小学校に入学する前だったので、私は五才か六才だったと思う。

家の外に出て見ると、もうすでに雪は三十センチ近く積もり、どんよりとした灰色の空から、とめどなく雪が生まれ出てくるように降っていた。そこは、前日の見なれた風景とはうってかわって雪自身の音しかしない。生家が牧場だったので、開けた場所に点在する木々にも牛舎にもサイレージにも雪は降りつづけ、木の幹や牛舎の木壁やサイレージのレンガ積みや白の画面に描かれた垂直な線や面や形だけになっていた。

私は息をのみ感動すると同時にこの白い清浄な世界を汚しては、いけないと子供ごろに思った。この世界にふみ込んではいけないし、自分の足跡もつけてもいけないと思った。絶対という言葉など知るよしもなかったが、今から思うと「絶対」ということに近い感覚を持ったような気がする。この日のことは、私のデザイナーとしての原点となっているにちがいないと思っている。

一方で、子供なのでむくむくと悪戯心も出てきて、わざと足跡をつけてみたり、悪ふざけで雪の中に倒れ込んだりしてひとしきり一人遊びをした。

その後の事は、思い出すことができないが、その時間と空間だけがポツカリと浮いているように記憶の中に残っている。

そんな記憶が関係しているにちがいないが、小村雪岱の『雪の朝』を骨董屋で、三十年ほど前に大枚をはたいて入手、愛蔵している。当時は、小村雪岱という名前も知らなかったし「雪岱」を「せつたい」と読むことも知らなかった。

『雪の朝』は、雪の日の風景で、室内に光が灯り家全体が行燈のようである。描かれてはいないが分厚くたれこめた雲も想像される。建具も含め日本家屋の持つ直線の特徴が簡素に描かれ、それとは対称的な雪のやわらかな有機的な曲線が美しい。

国宝になっている三徳山三佛寺投入堂をおもわせる日本家屋を含め、雪岱が空想で作りあげた美的な世界である。後に、自分の記憶と雪岱の絵があいまってこんな一句が生まれた。

おとのなきあしたへ雪とおとずれむ 方眼子



小村雪岱「雪の朝」(木版画) 個人蔵 雪岱は川越出身の日本画家である。

夜ににぎわう六軒町の長屋
撮影 小松正樹



ママと“キドー”のはちゃめちゃ逃避行



イラスト=上坂じゅりこ



ある母娘の人生を垣間見る

逃避行。どうなるか分からないが、とにかく現状を打破する強硬手段であり、さらに誰かと一緒にそれはないより甘美なものだろう。生活を手放し、新たな生活を得る。その希望を求める時間が、たとえ長すぎる人生の一部だとしても、あったという事実だけで糧になるのかもしれない。

児童施設で暮らすルーの元に、ハリウッドで暮らしていると聞いていた母・カーリーナが会いにくる

と電話が入る。徐々に実感が湧いてきたのか、思わず走り出したり、当日の朝はソワソワしながら歯磨きしたり、嬉しさが溢れちゃうルーがかわいらしい。再会したママの車に乗り込んだルー。ちょっとしたドライブのつもりであったがあれよあれよと施設を離れ、ついにはオランダからポーランドのおばあちゃんの家に向かうことになる。CDが取り出せなくなって「サイ」曲しか流れないオンボロのスポーツカーで、「これは誘拐なの」と堂々と言うカーリーナはアメリカンニューシネマながら。映画から出てきたような過激で破天荒なママは、小さくもないがまだ子どもである十一歳のルーにとって次第に懂れになる。「私たちはボニーとクライドだ」と指で作った銃を撃ち、モーター車を冒険したり、食い逃げしたり、さらにはカーチェイスまで。ボニーとクライドごっこはそれはそれで微笑ましいが、役を降りてルーがカーリーナをママと呼ぶときは切実なのに胸が高鳴る。一方カーリーナはルーをキドーお嬢ちゃんと呼び続けるところを見ると、自分が娘にしてあげられなかったことの自責の念があるのかなと思うずにはいられ

ない。キドーという呼び方には、ルーと一緒にいたくてもそれが難しかった葛藤と、古い映画を愛するカーリーナらしさが詰まっている。エンストした車をカーリーナが外から押し、ルーがアクセルを踏み動き出した拍子に叫んだ「ママ」に対する「お待たせ、キドー」が私は一番好きでした。

逃避行はわずか数日で終わるが、今後ふとしたときに二人はこの出来事を思い出すのだろう。気が変になりそうになれば叫ぶし、探していないときに探し物が見つかり、「もう一人じゃない」というルー



◆川越スカラ座

明治38年に寄席としてスタートした川越老舗の映画館。平成19年に惜しまれながら閉館したが、その後NPO法人プレイグラウンドの尽力により復活。コアな作品を懐かしい雰囲気の中で堪能できる。

川越市元町1-1-1
049-223-0733 火曜・水曜休館（祝日の場合は営業、翌平日に休館）
【料金】一般／1,700円 シニア／1,300円
障がい者の方（および付添1名まで）／1,000円
25歳以下の方／1,000円 高校生／500円 幼児／無料
※詳細はHP参照。http://k-scalaza.com/

文・ミムラ

「KIDOO キドー」2025年5月10日～23日 上映



あぶり珈琲の

「No.4」

席に座った途端に「4番ください」と言うのである。もうこれはクセかもしれない。この番号は自家焙煎しているあぶり珈琲のブレンドナンバーで、浅煎りのNo.1から深煎りのNo.5までが揃っている。バリエーションコーヒーやストリートももちろん美味しいが、特に何も考えずとも、私の身体はいつも「4番」を求めている。ちょうど良い温度で提供され、鼻先をくすぐる香ばしい香り、ストレスにならない舌触りの良い苦味。二十歳の時に「これからはブラックコーヒーを飲む!」と決めてから早ウン十年。地元の喫茶店で味わうこの「4番」は、忙しない日常からちよっと離脱するための必須アイテムなのだ。

自宅用に豆を買うときはお好みの粗さにカットしてもらえ。美味しい淹れ方は、ぜひマスターに聞いてみて。ちよっとしたコツで珈琲の香りは格段に変化するものだ。なんて、通ぶってみるのもたまには許してもらいたい。

⇒ No.4の珈琲に合うスイーツを教えてください!

おすすめは「ショコラケーキ」。コーヒーが入った濃厚でずっしりしたケーキです。No.4との相性も抜群です!



あぶり珈琲
川越市大手町15-8
049-226-8556
火曜定休、他

写真＝中里楓

陰翳礼讃

— 川越の蔵にみる、日本の暮らしと暗闇 —

現代とは違い電灯がなかった時代。
日本人は自然と一体になった生活様式の中で
今とは違う美的感覚を養っていた。
かの谷崎潤一郎の「^{いんえいらいさん}陰翳礼讃」が総じた
日本人の感性を感じる建物が、川越にはまだ存在する。
蔵——ここで商いをし、暮らしている
3人にお話を伺った。

文＝櫻井理恵 写真＝中村香奈子

七つの蔵を持つ 川越随一の老舗



「炭蔵」「穀蔵」「砂糖蔵」など、店舗の裏には五つの蔵が並ぶ

龜屋



建築士 守山登
龜屋九代目当主 山崎淳紀

天明三年に創業した菓子商龜屋。仲町の本店の通りから見える見世蔵と袖蔵、裏には五つの蔵を要する。菓子工場として使用された後に、現在では橋本雅邦の作品を展示する「山崎美術館」となった。「父に怒られて、蔵に閉じ込められたこともありすよ」と話すのは現当主の山崎淳紀さん。「閉じ込められたお蔵は金網がある重い扉で、障子が貼ってあるんですよ。そこからはあかりが入ってくる。その障子をビリビリ破って、母が助けに来るのを待っていましたね。日常生活に蔵があると、子どもは一回くらいは閉じ込められた経験があるのではないでしようか」実際に蔵の電気を消し、灯取りから陽だけが入る蔵の光と影のコントラストは、現代では考えられない異世界のような。扉



1. 蔵の2階には電気がなく、現在はほとんど倉庫として使われているそう
2. 防火のための分厚い扉。段差も多い

を閉め切り、厚い壁によって外界からの音を遮断された空間。昼と夜と、自然の光源と共に生活をしていた古の人々には、その暗闇の奥に何を見ていたのだろうか。川越の蔵などの調査・復元を行っているNPO法人川越蔵の会に所属する建築士・守山登さんは「実際に蔵で生活してみると、夏は暑いし冬は寒い。今とは気候が違います。

だからと言って、文化財になっている場合は空調工事のために壁に穴を開けることもひと苦労です」と話す。昔とは違って周りの建物も高くなつて、陽がはいり時間も少なくなり、蔵が生活の場としては適さない時代だ。それでも先祖が作り家業を支えてきた七つの蔵の価値は、龜屋さんのみならず、この地域の財産でもあることは間違いない。

灯取りから差し込む陽は蔵全体に届くわけもなく、常に暗闇が身近に存在する



裏の蔵は、扉を閉めるとこの暗さ。土壁に阻まれ、まちの喧騒も遠くなる



1.



2.

1. 大きな天井の梁が見える。比較的高い作りになっているようだ
2. 見世蔵の二階から除く一番街
3. 現在は陶芸教室として使っている蔵

40代くらいの商店主が蔵に集まって、うちで夜ずっと遊んでいた。当たり前のように近所の人が出入りしていて、今考えると結構真面目な話をしていたのかもね」薄暗い蔵の中で、麻雀に夢中な商店主たちの姿を想像する。なんともいい時代のお話である。

川越の蔵造り、といえは幸町の陶舗やまわだ。屋根に小さい鍾馗様がいる見世蔵では陶器を販売、2階は雑貨店になっている。当主の原知之さんは、中学二年生くらいまで、この見世蔵の二階に住んでいたそうだ。「クーラーはありませんでした。うちは瀬戸物屋だから、冬は大きい火鉢を使っていました。祖父がそこで温まっていたのを覚えています」と原さん。蔵の中は、

厚い土壁のため保温性が高く、外気が変動しても、室内ではちよつと遅れて気温が上下するらしい。体感する温度にタイムラグがあるとは、蔵に住む人だからこそ感じることだ。今は梁が見えるようになっていて、その堅牢な建築をよく見ることができる。建築の専門家で原さんの幼馴染でもある荒牧澄多さんによると、やまわの蔵の軒先部分は桁と梁を利用して正面側の軒をわざ

と低めに抑えた意匠にしているそうだ。もう一つ、店の裏にある原家の蔵は、現在では陶芸教室として利用しているが、(山崎家と同じく)原さんも叱られて蔵に閉じ込められた経験をお持ちだ。「鉄格子もあるしね。トラウマですよ笑」原さんが子供のころ、この蔵では毎晩近所の人が集まって、麻雀をしていたという。「お店が閉まった後に、私の父たち

3.



蔵に集まる
まちの人びと

陶舗やまわ



建築士 荒牧澄多
陶舗やまわ三代目当主 原知之

蔵に住むことを
実現させた、ある紳士の話



1.



2.

大正浪漫夢通りにいつの間にか質実剛健な中にも瀟洒な雰囲気併せ持つ美しい蔵が
お目見えした。4年ほど前のことである。この蔵の持ち主は、小島正巳さん。古くから川越で商売をしていた一族の出身で、ご本人はエンターテインメントの大手企業を勤め上げた。昔から古いものが好きだったという小島さん。地元川越を俯瞰してみたときに、こんなふうに奥まった区画で、手前で商売して奥に住んでいる、という昔ながらの家を自分でも体験してみたかったんだ」と語る。こうして実際に住んで、生活してみるということも重要な文化継承の一つだと考えたのだ。当時この物件を見つけた時には、どうにも古くて修復ができるかどうか、ということだったけれど、

3.



- 1.現在のは店舗になっている見世蔵の部分
- 2.二階へ上がる箱階段は、アンティークのものを調達した
- 3.二階のお座敷にある当時のままの襖

ど、建築当初の写真や改修前の形状が推察できる痕跡が残っていた為復原することができた。時代とともに改修され失われてしまった建築当初の箱階段に代わり、建物と同時代に造られた箱階段や建具を小島さん自らが調達したという。そして建築士の馬場崇さんの設計で改修し、建物を甦らせることができた。
令和2年にはこの場所で「tea salon 1901」として和カフェもオープンした小島さん。蔵の入り口はガラス張りにし、開放的なスペースにしつつも、その重厚な雰囲気はそのまま。現代では蔵造りの建物を手にいれることは難しいが、川越にはその歴史や建造物に魅了され、古きものが密やかに発する声を拾い、聞き入れる御仁がいるのである。

小島家

(tea salon 1918)



建築士 馬場崇
tea salon 1901店主 小島正巳



大正浪漫夢通りに面した二階座敷の様子

川越の蔵造り

山崎家住宅／龜屋 本店

「市指定有形文化財」

龜屋 本店
川越市仲町4-3
049-222-2052
<https://www.koedo-kameya.com>

天明三年（一七八三年）創業の老舗菓子商「龜屋」は、旧鍛冶町通りから旧志義町通りへ矩折になっている敷地にあり、店蔵を含む七棟の土蔵、客座敷などが並ぶ。高い箱棟や出桁造、二重軒蛇腹、観音扉、目塗台という土蔵造町家の典型的な様相で、中でも二階の観音扉は開いた扉が再び隣接する扉と噛み合わせされるという職人の意気込みを感じずにはいられない工夫が施されている。

原家住宅／陶舗やまわ

「市指定有形文化財」

陶舗やまわ
川越市幸町7-1
049-222-0989
<https://www.touho-yamawa.co.jp>

現在の幸町にあり、当時呉服商を営んでいた山本平兵衛が建てたもの。大火直後の明治二十六年（一八九三年）に棟上げされており、棟札には工事に関わった高柳鉄五郎（大工棟梁）ほか、川越の職人たちが名を連ねている。表通り側を切妻造、長喜院参道側を入母屋造とし、格式のある構えが特徴的。また二階の軒先では出桁の上に四段の蛇腹を回すなど、豪華な外観である。川越を代表する土蔵造町家だ。

小島家住宅／tea salon 1901

「景観重要建造物」

tea salon 1901
川越市連雀町13-4
049-236-3883
<https://www.instagram.com/1901kawagoe/>

大正浪漫夢通りにある蔵造り商家（見世蔵）。切妻造り平入り瓦葺屋根の二階建て。明治三十四年（一九〇一）に建てられた。長い間店舗として店蔵の姿は外壁に隠されていたが、平成三十年に修繕された。敷地は西に向かつて奥深く、中央通りの手前まで続いている。現在は「tea salon 1901」を営業。二階座敷の飾り障子などは破損していたものを忠実に修復し、当時の日本の細やかな意匠を蘇らせた。

美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれ／＼の先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生れているので、それ以外に何もない。

陰翳礼讃

われ／＼は、それだけでなく太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われ／＼の座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。

われ等は何処までも、見るからにおぼつかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも餘命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。我等に取ってはこの壁の上の明るさ或はほのぐらさが何物の装飾にも優るのであり、しみ／＼と見飽きがしないのである。

明治19年（1886）、東京市日本橋区に生まれる。16歳のとき父の事業が苦境に陥り、潤一郎は築地精養軒の主人宅の書生となる。明治41年（1908）、東京帝国大学国文科へ入学。24歳のときに、小山内薫、和辻哲郎らと第二次「新思潮」を創刊する。29歳で石川千代と結婚。関東大震災をきっかけに京都、兵庫に避難転居。以後関西各地に居住する。44歳で妻千代と離婚し、以後二度の結婚。54歳で『細雪』の執筆を開始し、昭和23年（1948）、脱稿。昭和40年（1965）、7月30日、79歳で死去。代表作として『刺青』『痴人の愛』『祀』『春琴抄』『陰翳礼讃』『細雪』『癡癡老人日記』など。

谷崎潤一郎 [1886-1965]

※谷崎潤一郎「陰翳礼讃」（1935年）より抜粋

day



川越の蜂蜜好きな
夫婦が送る、
とっておきの
甘いおくりもの

「お花の蜜によって、全然違う香りがするんです」親しみのある笑顔で季節のおすすめやお好みの味を薦めてくれる野々山夫婦は、川越で養蜂場を営んでいる。すべて自家採蜜で無添加、非加熱のこだわりの蜂蜜は、今や川越を代表する農産物のひとつになった。毎季、季節ごとにミツバチと共に国内を旅しながら、その土地の美味しい蜜をお裾分けしてもらい、私たちに届けてくれる。その透明感のある美しい蜂蜜は、花ごとに少しずつ色と香りが違う。自分のお好みの蜂蜜を見つけられる場所として、野々山夫婦は2021年に実店舗をオープンした。10種の蜂蜜はお試しできる小瓶でも販売されていて、自分の好みのものを探すことができる。天然の蜂蜜を身近に置いてほしいという思いから、蜜蝋を使ったアイテムを考案するなど、今や大人気の野々山養蜂園。「おいしくて幸せになれる蜂蜜を作りたい！」と奔走する野々山夫婦と蜂たちの優しく愛おしい関係性、ぜひお気に入りの蜂蜜で感じてみてほしい。

野々山養蜂園

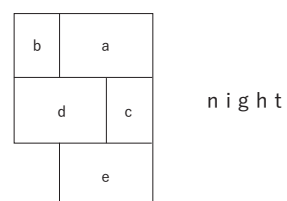
江戸創業
老舗の鰻店で
秘伝の味を
いただく幸せ

江戸時代から仲町のこの場所で鰻店を営む小川菊。現当主の小川修一郎さんは七代目だ。「当初は川魚料理の飯屋でしたが、鰻の人氣が高く、次第に鰻専門店になったようです。」出身は山田の方だったというが、鷹狩りに来るお殿様に勧められて、今の場所での営業を始めたことと伝えられている。「川越は本店も多かったから、高級な鰻も喜ばれていました」と話す小川さん。東京の鰻よりもタレが甘辛く、ふわりとした身は老舗が培った江戸時代からの技術の賜物だ。注目すべきはその建物にもある。築百年を誇る店舗は珍しい木造三階建て。三階は関東大震災の翌年に増築したもので、現在は店舗としての利用はできないが、風雅な座敷から通りを見下ろすことができる。川越の地元にはこの小川菊の味が、自分にとって特別な味になっている人が多いのが事実。祖父母に連れられて行った幼い頃のあの味が、大人になってちよつと贅沢にお酒とともに楽しめるこの幸せ。ずっととまに残り続けてくれる老舗店には感謝しきりである。

小川菊

night



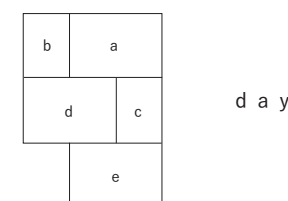


night

a. 珍しい木造3階の内部 b. これぞ小川菊、ふっくらと仕上げる鰻は川越っ子のソウルフード c. 暖簾をくぐる前から、香ばしいタレの香りが食欲をそそる d. ずっと受け継がれてきたタレには多くのファンが e. 現当主の小川修一郎さん。大正浪漫夢通りの活性にも深く関わる



小川菊
川越市仲町3-22
049-222-0034
平日: 11:00~14:00
16:30~19:30 (LO19:00)
土日祝: 10:40~18:30 (LO18:00)



day

a. 大切に育てられているミツバチたち b. 蜂たちの世話をする野々山純さん c. 季節の花に蜜を求める d. 蜂が大人しくなる燻煙機を吹きかける e. 仲良しの野々山夫妻



野々山養蜂園 はちみつといろいろ
川越市岸町2-19-3
営業日などはInstagramより
ご確認ください
https://www.instagram.com/nonoyama_yohoén/



和竿師「小春」●小春友樹。一九七三年生、川越出身、志多町在住。国内でも数少ない伝統的な江戸和竿を作っている竿師。

川越いきもの調査報告 ― ⑤ 弁天横丁 こはるびより

文・絵＝小春



「川越、廃墟」でネット検索すると、一番初めに出てくる場所「弁天横丁」を皆さんはご存知でしょうか？

「弁天横丁」とは、観光客で賑わう一番街を過ぎた所にある、昭和の雰囲気漂いまくっている小さな路地の名称である。建物自体は大正時代からあるそうで、以前は確かにくたびれた感じもあったが、ここ数年で川越蔵の会を初めとする有志の方々により大掛かりなりノベーションを経て見違える様な変貌を遂げた。

そんな弁天横丁の一角に、2021年に私の工房が入る「喜多町弁天長屋」が完成した。運営は先の川越蔵の会。川越のアーティストや、ものづくりに関わる人達の為の長屋だ。ここには絵描きさんからデザイナーまでいるし、ギャラリーや、北欧のヴィンテージの器があるかと思えば、その隣には革靴修理屋さん。二階では着物も着付けてもらえるし、何なら人力車にも乗れる。そして一角にあるトモリ食堂は手頃な値段でいつも大行列だ。月末の立ち飲みイベント「ペロペロバー」は夕方から地元近所の人が集まりそれはもう人気だし、その他にも弁天屋市や、土間を活用したイベントが開催されて

ニンゲンという生き物が集う場所

いる。

そしてこの長屋、そんな催しをとり仕切っているのはいつも女性のメンバーが中心だ。長屋の土間はいつも女性陣に占拠されて楽しそうなおしゃべりがいるし、何よりこの通り自体、女性が絵になる気もする。そう、実はその昔、この通りは芸者さんが大勢いた通りなのである。当時は置屋が連なり、弁天様が祀られて、それが「弁天横丁」と呼ばれる由縁ということである。成程、それは歴史的事にも女性性が主役の横丁とは納得がいく。

インバウンドで日本の観光地はどこも盛況で川越の状況も同じだ。その反面、地元の人にとっては魅力に欠けるお店も多い。だが、この横丁には地元民に愛されるお店がある。ものづくりと、地元の人々が集まる様な通りにしたい――。最初にこの場所を手がけた先人はそう熱く語っていた。今の観光地・川越が失いつつある、そんな意気込みが皆さんに伝わるといいな、と生意気にも思うのである。

僕と散歩と

気ままなレシピ

【第六回】

染谷悟

Daily Stand Copoli

最近、僕の1日は大正浪漫通りにあるHILLPINE'S ESPRESSO*[※]で始まる。

毎朝、ここのHILLPINE'S コルタードを2杯飲むのが日課になった。小ぶりで厚みのあるロックグラスで出てくるこのコーヒーは、空っぽの胃袋に目覚めのパンチをくれる。

「おはよう」

体が温まったら、今日は自転車で街を回ろう。細身のフォルムの愛車は1960年代のビアンキ。60歳を優に超えてる自転車だけどまだまだ現役だ。

黒漆喰の蔵造りを横目に着いたのは札の辻。そういえば、川越に

「僕の求めるもの。それは、シンプルでおいしいもの。」

Daily Stand Copoli
川越市菅原町10-5
鎌田フルーツビル101
080-5932-1650
18:00 - 23:00
月曜定休 + 不定休



0℃の油色に着くまでしっかりと揚げる。ついでに川越産の里芋を洗い、皮つきで8等分にカット、レバーと一緒に油で揚げた。

レバーフライを旬のキャベツ、人参のビネガーマリネと一緒に、トーストしていいいやわらかな食パンでサンドする。里芋は軽塩だけ。レバーサンドに合わせるのはアルゼンチン産フルボディーの赤ワイン。

シンプルな味付けだけに赤ワインがソースの替わりだ。
窓の外はもう春。毎日少しずつ暑さも増していくだろう。季節と一緒に、そろそろ僕もシフトチェンジだ。

【材料】1人分

食パン…2枚
豚レバー（薄めのもの）…1枚
パン粉…適量 塩、胡椒…適宜
油…適量 卵…1個
小麦粉…大3 水…30cc
野菜（好みのものを千切りに）…適量

※HILLPINE'S ESPRESSO
川越市連雀町13-1 1F
049-236-3091
7:30-18:00 (17:45L.O.)
無休
詳細はInstagramやお電話でご確認下さい。



ほしお さなえ先生と 歩く川越

——ほしお先生が初めて川越に来た時の印象は、どうでしたか？

「私は所沢市出身なんです。だから子どものころに何度か来たことはあるんですが、2000年代になって訪れたとき、自分の記憶のなかの川越とはずいぶん変わったな、と驚きました」

——昔の川越はどんな印象だったのでしょうか。

「子どものころというのは1970年代で、

インタビュー＝櫻井理恵 写真＝中村香奈子

作家・ほしおさなえ先生の「活版印刷三日月堂」や「菓子屋横丁月光荘」などのシリーズは、川越が舞台となっていて、さまざまなシーンにまちの様子が登場する。晴れたある日に散歩をしながら、ほしお先生が感じる川越のこと、活版印刷のことを伺いました。

そのころは蔵造りの建物も看板で覆われていたんですね。だから古い建物だとは全然気づかず、ふつうの町に見えていました。それが2000年代に訪れたときには、古い建物が姿を現して……。東京からこんなに近いところに観光できるスポットがあったんだ！と感動しました」

——その時はどのあたりをご覧になったのですか？

「一番街と川越城のあたりを歩きました。数年後にもう一度来て、そのときは川越まつり会館に入りましたよ。こんなに立派なお祭りがあるのか、とその時知りました。」

歴史深い川越と活版印刷 古きものが息づく、そのまちを歩く



出世横丁の石畳。旧第八十五銀行の建物は今も川越のランドマーク

ほしおさなえ
hoshio sanae

小説家。1995年「影をめくるとき」が群像新人文学賞小説部門優秀作に。一般小説、ミステリー、ファンタジー、SF、児童文学など幅広い作品を手がける。『活版印刷三日月堂』シリーズ（ポプラ文庫）、『菓子屋横丁月光荘』シリーズ（角川春樹事務所）など川越にまつわる作品のほか、『三ノ池植物園標本室（上・下）』（ちくま文庫）、児童書『ものだま探偵団』シリーズ（徳間書店）など。

——「活版印刷三日月堂」は、ほしお先生の作品で初めて川越が舞台になったシリーズだと思うのですが、きっかけはなんだったのでしょうか。

「編集者と三日月堂シリーズの相談をしていた時、作品の舞台をどこにしようかな、という話になりました。実はそれまでの作品には実在する町を登場させたことがなかったんです。でも三日月堂シリーズは活版印刷という、かつて盛えた技術をテーマにしているので、現実の町を舞台にしたいと考えました。具体的にどの町にするか考え

ていたときに、川越のことを思い出したんです。ほかにもいくつかの候補はありましたが、歴史があるまちを舞台にしたいと思ったのがきっかけですね」

——川越に住むものとしてはとても嬉しいことでした。

「横浜も候補にあったのですが、古いものを生かしながら町を発展させているところが、作品のイメージに合いました。数回川越を訪れ、町をめぐりながら、作品に登場させる店の場所などを決めていきました。」

——舞台は鴉山神社の近くになりました。
「はい、ちょっと一番街からは外れたところがいいなあと思っていて。現実の川越の歴史を調べて、昭和期に実際に印刷所があった場所の近くを選びました。」

——活版印刷を題材にしようと思ったきっかけはなんだったのでしょうか。



「菓子屋横丁月光荘」の舞台となった喜多町弁天横丁の一角。芸者の置屋だった

「私はずっとTwitter（現X）で140字小説を発表していました。それを形にしよう、と思った時に、デジタルでデザインして冊子の形にすることはすぐにできるけど、それではネットで見ると変わらないかもしれない、と思いました。もともと活版印刷に興味があったので、活版印刷で作ってみたい、と考えました。

でも、そのころには活版印刷で本を作れ

残ってきたもの、伝えられてきたこと—— ほしお作品に見る 今だからこそ必要なものとは

るところはなくなっていました。無理なのかなと思いますが、色々調べていたら、古い機材をゆずり受けてあらたに活版印刷に取り組んでいる30代、40代の若い人たちがいることがわかったのです。それで、その人たちと一緒に作ってみようかな、と。いきなり本を作ることはできないので、まずは140字小説を名刺サイズに納めてみることにしました。

活版印刷を知らない若い世代が、活版印刷の仕組みって面白いな、色々なことができるな、という興味から、意欲的に制作していることも知りました。もう引退した活版印刷の職人さんたちが、若い人がやってくれるなら、と技術を伝授してくれる。活



川越の街角には、多くの神社仏閣があり、今でも信仰の対象になっている

版印刷にはいまの印刷とはまた違った手触りがありますから、それに惹かれる人も多かったんです。

活版印刷が主流だったころは、安くたくさん印刷しよう、という意識だったのですが、活字自体がめずらしくなっていたいまは、小ロットで、活版印刷の風合いを生かした魅力的なものをしよう、という考え方に変わってきています。

そんな光景を見ていて、いつかそのあたりのお話を自分の小説にしたいなあ、と思

っていたところ、ポプラ社さんからお仕事もののシリーズのお話をいただいたので、活版印刷を題材にした作品を書きたいとお話ししました」

——編集さんの反応はいかがでしたか？

「編集さんも若い方で、最初はあんまりピンと来ていなかったようですが、イベントに行ったり印刷博物館に行くうちに興味が出てきたようです。シリーズを書き進めていくうちに、実は活版印刷という技術に反応する人がとても多いことがわかって。出版、本と活版印刷はともに歩んできたものですから、相性もいいですよね」

——現代、紙離れ、と言われて久しいですが、古いものの価値をもう一度見直すきっかけにもなる作品で、印刷会社としても嬉しい限りです！

「今は本、雑誌も難しい時期です。印刷物のあり方もどんどん変わっていきますが、人の手で作られたものには独特の魅力があるように思います。活版印刷三日月堂では歴史深い川越を舞台にして、ずっと続いてきた技術の素晴らしさやものを作る喜び、工夫することの大切さを若い人たちに伝えられたら、と思っています」

——ありがとうございます



川越が舞台のほしおさなえ作品
「活版印刷三日月堂」シリーズ（ポプラ社）
「菓子屋横丁月光荘」シリーズ（角川春樹事務所）
「紙屋ふじさき記念館」シリーズ（KADOKAWA）
「うせものがかり〜なくしたものの、見つけます」（ポプラ社）

#01

MAPLE BASE

秩父



秋には銀杏並木が美しい秩父ミュージアムパーク。ここに、日本初のシュガーベース「MAPLE BASE」があります。秩父のカエデから樹液を採取し、メープルシロップを製造販売。ログハウス風の温かみのあるカフェでは、パンケーキやメープルシロップを使ったドリンクをいただけます。

なぜ、秩父でメープルシロップなのか？ MAPLE BASE を運営するのは、株式会社TAP&SAPの井原愛子さん。外資系の会社に勤めていましたが、地元秩父の価値あるメープルを通じて秩父地域のPRだけでなく雄大な山々の自然を守っていきたくと考え、単身カナダへ渡りました。カナダではメープルシロップの製造を勉強し、本場カナダから店舗内へ製造機を導入。樹液採取は別の事業体（秩父樹液生産協同組合）が行っており、煮詰めて製品にするまではTAP&SAPが行います。

それまで、地元ではあれど秩父の山に足を踏み入れたことはあまりなかったと言う井原さん。豊富な種類のカエデが息づく地元の自然に触れた時、改めて「自然ってすごいんだ」という思いに駆られたと言います。林業についての勉強やカエデの樹の調査など、多くの人の協力を得てシュガーベースオープンに漕ぎ着けたのは2016年のことでした。

現在も新しい商品として大学などの研究機関とNPOが共同開発した「第3のみつ」（※花蜜だけでなく果実や野菜ジュースなどをミツバチに与え、多様な味わいを楽しめるハチミツ）のブランディングや、カエデの樹液採取を見学する秩父のエコツアーの企画なども行っています。あたりまえのように享受している地域の自然をもう一度見つめ直した井原さん。「森から様々な恵みが、樹液のように流れ出てくる。その出口となるような活動をしていきたい」数少ない国産のメープルシロップを味わえる場所「MAPLE BASE」。みなさんも甘くてやさしい埼玉の味を訪ねてみては。

秩父が誇る、日本初のシュガーハウス



〒368-0102
埼玉県秩父郡小鹿野町長留1129-1
0494-26-6150
営業詳細については
Facebookをご覧ください。
<https://www.facebook.com/MAPLEBASE.JP>

文＝櫻井理恵 写真＝中村香奈子



川越氷川神社の本殿

第七回 川越 四方山話

氷川神社本殿の再建と川越町人

文＝川越市教育委員会 文化財保護課 宮原一郎

現在、氷川神社に鎮座する本殿は、天保十三年（一八四二）起工し、明治三年（一八七〇）に上棟されたとき、埼玉県の指定文化財に指定されています。木目を生かした素木の彫刻が特徴的で、本殿高欄の下側にある腰羽目の部分には、城下町である川越十ヶ町が保有する氷川祭礼の山車人形（浦島、天岩戸、小狐丸、関羽と周倉、布袋、小槌、諫鼓鶏、為朝、秀郷、山王）をモチーフにした彫物があることも知られています。ここでは、この本殿が再建された経緯を、町人が記した記録から見ていきます。

＊市指定文化財元町二丁目井上家文書Bに「覚書」参照。
元禄九年（二六九六）に上棟された本殿が大破したため、文政十三年（一八三〇、天保元年）八月に、氷川祭礼を七年間休止して、その費用を本殿再建費用に充てたいと、城下の町人たちは川

越藩に歎願しました。しかし、実際に次の氷川祭礼が行われたのは天保十五年（一八四四、弘化元年）で、休止の間は十五年にも及びました。氷川神社本殿の再建費用の捻出が、いかに難航したかがえまます。

ようやく再建の方向性が出たのは、天保十年（一八三九）になってからのことでした。本殿の再建場所は、それまで本殿があつた場所より奥の神木がある場所に移動されました。翌年九月には、再建する本殿は「先規通り塗地」にすること、志義町（現仲町等）の町名主榎本甚左衛門と、南町（現幸町等）の町名主井上利右衛門が世話役となること、川越藩に報告されました。つまり、元禄年間の本殿は漆などで塗られた建物であつたことがわかります。

天保十一年（一八四〇）九月九日、志義町小松屋十郎右衛門他三名から本殿再建の見積書が提出されました。それ

によると、塗地の場合と素木の本地・彫物とはおよそ倍近くの開きがありました。

さかのぼること同年四月に、川越町では、塗地か本地のどちらかの選択を氷川社の神前で入札した結果、本地が多く票を獲得しました。川越町は「神慮」が下されたとして、川越藩に報告しましたが、塗地・本地の両様の見積りの作成を川越藩は指示しました。

この見積りを元に川越藩と協議するものの、これまでの塗地を変え、費用も安くなると考えるならば、川越町の「神慮」はいかほどのものなのか。同年十月六日に川越藩の町役所は、当初の取り決め通りに塗地での再建を命じました。

その後、三方領地替などの問題により、この件は沙汰済みになりましたが、天保十三年三月に願書を川越藩に再提出して「白木造」による本殿再建が認められました。一度は、川越町の「神慮」を批判しつつも、結局は川越藩としても、「白木造」による再建を認めるしかなかったと考えられます。

この天保間には、飢饉があつた時代としても有名ですが、祭礼を休止してまで、氷川神社本殿の再建を目指した川越町人たちの情熱が、いまでも彼の本殿に脈打つさまを感じずにはいられません。

天台宗 喜多院 第五九世住職

塩入秀知

遠い昔より、おおらかな信仰に見守られてきた川越。悠久の時に息づくまちの人々の思い——。名刹・喜多院が見てきた歴史を伺いました。

第六回

川 越 人

kawagoe-jin interview

インタビュー＝櫻井理恵 写真＝中村香奈子

平安初期からの創建 僧侶たちの学問所として 名を馳せた 川越随一の名刹

——川越といえば喜多院、ということで、地域の方にも昔から親しまれているお寺です。

●創建は平安時代初期。西暦八三〇年になります。残念ながら火事が起こって、平安後期から鎌倉初期にかけてはほとんどお寺として形を成していなかった時代もあるようですが、鎌倉中期に再建されました。

——想像を超える歴史をお持ちですが、住職で何代目になりますか？
●私で五九代目となります。元々は無量寿寺というお寺があったのですが、焼失してしまい、改めて再建されました。その時中心になったのは中院。真ん中にあるから中院です。そこから北に見て北院（喜多院）です。今はもうないですが、南院というのもありました。



「徳川家光公 誕生の間」(客殿)。書院、庫裏とあわせて江戸城紅葉山（皇居）の別殿を移築した。襖と壁面には墨絵の山水が描かれ、湯殿と厠も併設されている



「徳川家光公 誕生の間」の天井。彩色による八十一枚の花模様が描かれている

この3つの院が無量寿寺として再建され、その時に尊海さんという方が初代の住職となつて、そこから数えて五九代目ということになります。

——ずっとお寺はこの場所にあったのでしょうか。

●中院は、今の仙波東照宮ができるときに少し移動されています。中院が中心となつて、今でいうところの地方大学として、宗派間わずの多くのお坊さんが学びに来ています。一部役所的な役割も担っていたのではないかと思います。ここにもそういったお坊さんがたくさん来ていたそうです。そのうち戦国時代になってからは少し衰退した



寛永寺境内に建つ根本中堂。明治十二年に喜多院から移築されたと伝わる、本格的な天台宗寺院本堂

時期もあったようですが、江戸時代初期に天海僧正が北院の二七代目の住職になられました。天海さんは徳川家康との親交が深かったことから、家康公も何度かこのお寺に訪れています。そんな関係性もあって、慶長十六年に三年かけて伽藍や境内などを整備し、その時から「喜びが多い院」の喜多院と名前を改めました。ここは天台宗ですが、総本山が比叡山となるのですが、いつときは、東の比叡山ということでも「東叡山」を名乗っていたこともあります。

●それだけではなく、仏教の勉強にもいらしていたようです。特に家康公は戦国時代から色々な思いを持って天下泰平を目指していたでしょう。良いことも悪いこともあったでしょうけど、それらの救いを仏教に求めていた。戦国武将は多かれ少なかれ、仏教を勉強された方は多かったと思います。天海さんに江戸城や駿府城で、あるいはこの喜多院に来て、仏教を通じた交流をしていたわけですね。家康公が亡くなられた後は、ご遺体を一度久能山に葬って久能山東照宮を作り、一年後にご遺体を掘り起こして静岡から日光へ移したのです。遺言に「日光へ移すように」と書いてあり、家康公は東日本の鎮守になられたわけです。久能山から日光へ移動する際、この川越にも四日間ほど家康公のご遺体が寄られています。その後また日光へ向かって出発し、今

天海僧正と江戸幕府との 深い親交が 川越にもたらした文化を 今にのこす

の日光東照宮ができました。

——今では川越は観光地としても有名になってきましたが、江戸時代のお寺と町の関わりはどのようなものだったのでしょうか。

●あまり記録に残っていませんが、学問所としての機能がほとんどでしたから、それほど街の方が出入りしているということはないと思います。基本的にはお坊さんが訪れている。川越城との関わりはもちろん深かったと思います。江戸初期、家光公の時代に、また火事に会ってしまったわけです。

天海さんも言い伝えでは当時晩年（※一〇八歳で亡くなったと伝えられている）で、喜多院の住職として名前はあるものの、江戸城近くの上野寛永寺にお住まいになっていました。この喜多院が火事になってしまったと聞いて、天海僧正ゆかりのお寺をすぐに再建しようと、江戸城の御殿を移築してきたのです。約四百年前、それが今のこの建物です。

——四百年前ですか！

●江戸城は時代ごとに何度も建て直していますから、今の東京には古い建築物はもうあまり遺っていないのですが、ここ喜多院には江戸初期の江戸城の建物が現存しているので、とても貴重です。春日局化粧の間、家光誕生の間がこちらに移築されていますが、当

誇りだったと思います。

——その後、明治に移行し廃藩になった時、お寺はどのような状態になっていたのでしょうか。

●江戸が終わった時、喜多院に限らず、お寺はどれも大変だったと思います。廃仏毀釈がありまして仏教を排斥するという動きがありました。江戸時代は江戸幕府から御朱印地といって田畑をいくらか頂戴して作物を作ったり、お米や野菜は奉納していただいていたお坊さんは心気なく勉強ができたわけですが、明治になってからはそれらも全てなく

なってしまう、境内も四分の一程に縮小されました。当時のお坊さんは食べるにも困っていたと思います。もともと学問するためのお寺ですから、檀家さんも少なく法要もあまりなかったもので、昭和初期くらいまでは維持するだけで精一杯の時代でした。戦後、塩入亮忠住職の時にやっと政府の文化財指定を受けたおかげで、傷んだ建物の修復に取り掛かりました。亮忠住職がこの喜多院に来た頃は「天井を見上げたら空が見えた」と。つまり天井にも穴が開いているくらいの状態だったよう



日本三十三羅漢の一つに数えられる喜多院の五百羅漢。五百を超える像は天明二年（一七八二）から文政八年（一八二五）の間にわたり建立された



寛永一六年（一六九三）に建立された多宝塔。明治、昭和と移築や解体修理を施し復元された。総高十三メートル



神仏のご加護を受け、 安寧な生活を祈る 静かでおおらかな 日本人の心

です。その後に住職になった塩入亮善
住職は、鬱蒼としていたお堂の前を切
り開き、明るい境内に整えました。昔
は樹々が多く、あまり町の人が訪れる
感じではなかったようで、一月三日の
だるま市の時くらいしか賑わうことが
ありませんでした。

——今ではお正月だけではなく、平
日も賑わっています。

●だるま市は明治くらいから始まった
ようです。昭和の終わくらいまでは
川越にもだるま職人さんが多くいたそ
うです。お堂も修復して、境内が広く
なって、皆さんが来てくださるようにな
って信仰も深くなってきたというこ
とです。文化財指定により耐震工事な

ども行なっておりますから、できるだ
け長くこの歴史や文化を遺して伝えて
いきたいと思っています。

——先ほどお話しにもありましたが、
近くには仙波東照宮や日枝神社もあ
りますが、仏教と神道というのは、ど
のような関わりがあるのでしょうか。

●昔から仏教と神道は常に密接な関係
にあります。日本には天皇陛下がおら
れ、神道が元になっていますが、仏教
は外から入ってきて受け入れられた。
神道も仏教も、教義的なものは違いま
すが、日本人の心の中に「信仰」とい
う面で区別は見られないものと思いま
す。川越には神社仏閣がたくさんあり

ますが、代々、両方にお詣りされて来
られたというのが日本人の心です。分
け隔てなくお詣りしてご利益を頂戴し、
良い人生を歩んで行こうという日本人
の素直な心は、本当に素晴らしいと私
は感じています。手を合わせて神仏の
ご加護を受け日々の生活を充実させる
、安心させる。もう日々の生活の中に溶
け込んでいることなのです。

——いま、川越は観光でも賑わいを
見せていますが、観光スポットとい
うことで喜多院にいらっしゃる方も
多いと思います。

●こういう歴史あるお寺を預からせて
いただいている身としては、少しでも川
越の歴史や文化を知っていただくお手
伝いはしたいなと思います。特に最近
では外国の方も多くなっていますので、
やはり知っていただくという意味では
案内の仕方、看板の書き方、あるいは
スマートフォンなどでデジタルでのご
案内方法など、まだまだ課題が多いと
思います。信仰の場所でもありますか
らできることは限られますが、町の
方々に協力しながら川越全体をもっと
多くの方に知っていただき、感じてい
ただけるようになっていったらいいな
と考えています。きつといらした方は、
この町の風景を眺めているような思いを
持たれるでしょう。気に入ったところ
や新しい発見があればまた来てくださ



川越大師 喜多院
川越市小仙波町 1-20-1
049-222-0859（喜多院拝観寺務所）
9:00-16:00

住職にお話を伺った約一時間半。江戸時
代から現存する建物でのひとときは、お
話いただく時代ごとのシーンがまるで目
の前で展開されているような感覚に陥る
ほど、素晴らしいものだ。強力な場
の力、そしてこのおおらかな信仰に守ら
れる川越のまち。地域にとって何が本当
に大切なのか、考えさせられた。

る。同じ方が何度も何度も来ていた
ける町になるといいなと思います。新
しく作られたテーマパークも楽しいで
すし、そこから作られていく伝統もあ
ると思いますが、一方で以前からずつ
と続いているこの土地の生活の風景、歴
史を背負うと同時に、将来も見ている
地元の人たちの努力は本当に素晴らしい
ものです。

premium information



紙と文字に思いをのせて
—活版印刷 & 和綴のワークショップ

文星舎

2023年に櫻井印刷所がオープンした「文星舎」
では、活版印刷や和綴製本の印刷文化を通して、
紙や文字に触れていただけるお店です。川越にま
つわる商品やこだわりの紙商品の販売、和紙や活
版印刷の文化を伝えるワークショップの開催をし
ています。

文星舎
川越市元町2-4-5（札の辻近く）
049-222-1164
定休日：火曜・日曜、他
10:00-16:00
bunseisha@sakurai-p.co.jp
詳しくはInstagramや櫻井印刷所のHPを
ご確認ください。

kawagoe premium 8

2025年12月発行予定

特集1
明治の川越

特集2
川越・音楽談義

特集3
篆刻の世界 —小林斗盞の軌跡

連載 川越 day & night
川越人
いつものください！

※掲載内容は予告なく変更になる場合がございます。

next issue

編集後記

やっと、印刷することができました。
「kawagoe premium」7号をお届けいた
します。さて、特集で取り上げた小村
雪岱。昭和17年に出版された『雪岱画
集』（高見澤木版社）の序文では、友人
でもあった鍋本清方が雪岱の出身地で
ある川越について、「小村さんの生れた
川越は江戸に近く、よほど前の大火に
舊形を失ったけれど、それまでは落ち
つきを有った古い御城下、…」と記し
てあります。戦前の川越の様子、明治
の大火後には建物だけでなく色々な物
事が急速に変わっていったのでしょう。
2020年からさらに大きな変化を遂げた
今、もう一度「kawagoe premium」を
発行できるようになったのは、読んで
いただける皆様のおかげです。今後と
もどうぞよろしくお願いいたします。



表紙写真＝角布（文星舎）
撮影＝熊谷昭典

編集・執筆 櫻井理恵
デザイン 熊谷昭典 (SPAIS)
撮影 中村香奈子
小松正樹
中里楓
SPAIS
イラスト 上坂じゅりこ

special thanks
地域のみなさま

kawagoe premium
小江戸にくるひと、住まうひと。

令和7年5月1日 発行

企画・制作 カワゴエ・プレミアム編集部
発行・印刷 株式会社櫻井印刷所
〒350-0062 川越市元町2-4-5
tel. 049-222-0935

製本 有限会社益子製本
特別協賛 溝口洋紙株式会社

©2025 Printed in Japan

株式会社櫻井印刷所は2024年に100周年を迎えました。

